

内山完造研究会報告①

内山完造『花甲録』読み合わせ会の記録 (1)

菊池敏夫 (神奈川大学特任教授)

2018年4月に内山完造研究会が発足し、何から手を付けていこうかという議論のなかで、内山完造に関するメンバーの共通理解のようなものを作り上げるべきだ、せめて『花甲録』だけは研究会の基礎知識としたい、という意見がきっかけとなり、読み合わせ会は始まった。参加者は、内山籬氏を初めとし、大里浩秋、孫安石、柳澤和也、中村みどり、松本和也、川崎真美の各氏と私の8人である。会は、これまで5月24日、7月26日、10月4日、11月22日、2019年1月10日と、都合5回開かれている。

さて、「花甲」とは、中国では「還暦」「60歳」のことである。『花甲録』は内山完造60歳まで(1885~1945年)の記録という意味である。「人間の歴史なるものは人間と云う点に於いては四海ことごとく同じではあるが、一人として全く同じ歴史を持つものはその人の外には無いのである」(「小序」という理念のもとに止むにやまれずして決意したもので、64歳の時の作である。

伝でありながら編年形式をとった記録であり、またこの書の中心となる自伝の部分を歴史年表に対して「追加事項」とするなど、形式だけをとっても極めて異色の書である。これをその内容と合わせて、春名徹は「『花甲録』(1960年)は、歴史年表と内山個人の行動を組み合わせた独特の形式で、明治人の反骨、キリスト者の誠実、商人のしたたかさ等々、要するに内山的なものの独自性をきわめて素直に表現した作品である」(『世界大百科事典』平凡社)と評した。編年の形式をとった理由と思われるものが「後記」に見られる。すなわち、最も必要とした妻のみき(中国語表記では「美喜」)さんが1945年1月に昇天したこと、上海生活を書き付けた日記や雑記が内山の帰国時、何一つ持ち帰ることが出来ず、全部無くしたことによって、「よるべきものが1頁もない」という状況があった。「そこで窮余の一策として日本歴史年表に拠ることにした。年々の大事小事を読みながらこれを写して行く中に、自分の記憶を呼び出すと云う誠に妙な方法をとった」のである(「後記」)。

ところで、内山が依拠したという「日本歴史年表」とは一体どのようなものか。読み合わせ会の席で内山籬氏が、当時三省堂からそのような名前の本が出ていた、ということをお話されたので調べてみた。それは、大森金五郎・高橋昇造共著『最新日本歴史年表(増訂版)』(三省堂出版、1945年)で、新書版782頁の分厚い本であった。内山の引用したものをこの原本と照合するとピタリと合い、内山がこれを利用したことが確認できた(図2参照)。なお、年表には、1920年から中国関係の重要事項を記した「特記」が追加されている。

読み合わせ会は定例会の前半の約1時間を取って行われている。これまで5回開かれ、現在1935年までの読み合わせが終了した。会の進め方としては、年次ごとに歴史年表を確認し、内山の自伝にあたる「追加項目」のなかで確認すべき点や疑問の点があれば相互に自由な討論を経て次の年次にすすむという形をとっている。以下、読み合わ

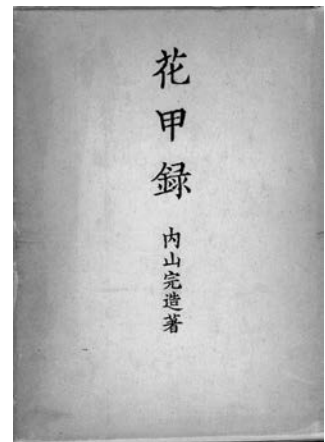


図1 『花甲録』



図2 『最新日本歴史年表 (増訂版)』



図3 読み合わせ会の様子

会において話題となったこと、そして私が個人的に興味をもったことなどを略述して記録としたい。なお、今回は1930年までの記録である。

1885年1月11日、現在の岡山県井原市芳井町にて内山完造は誕生した。内山は幼少期から多弁で、それは「雀百まで踊り忘れず」であった。岡山で内山晩年の講演記録の音声聞かせてもらったが、話し口は流暢で活力が感じられた。多弁は、内山の他筆ぶりと合わせ考えると、その後の活発な執筆活動の源泉でもあったように私には思える。1897年、内山12歳までの学校生活は、塩辛（いたずらっ子）で鳴らし、1000人も生徒がいた精研高等小学校でも極めて目立つ存在であった。他方、このころ母・直の「女大学」そのものの生き方からは「無抵抗の態度」を学んだという。この多弁の塩辛と「無抵抗の態度」とは表裏一体のものとなってゆき彼の生涯を貫く行動理念となったと私には思える。

1898年の「追加項目」には、大塚商店で丁稚をしていたときのこと、重い荷物を丁稚車で運んだが、「この車は後年上海に輸入されて老虎車と呼ばれて、遂に従来の小車と云う一輪車と交代するに至った革命児である」とある。私にとっては新情報であった。

1897年から1912年までは、内山は大阪や京都の商店で丁稚奉公をしながら商売のノウハウ、商人の成功や失敗、商人の处世などを身をもって学んだ。「損と益とは因果の小車（おぐるま）だ。損ばかりがつづくこともない、益ばかりがつづくものでもない」とある。1908年。内山23歳、日本人は五尺だが、自分は四尺五寸だから「若かず四寸の人間の社会（中国のこと）に入るべし」と妙な消極的な考えを起こしたとあり、「中国」に対する意識の芽生えが見られる。

1913年、28歳。京都教会の牧野牧師の仲介で参天堂の田口社長と知り合い、参天堂の上海出張員となる。この年の「追加項目」は20頁にわたる大部なスペースを用い、上海を拠点に中国各地で紙看板・鉄看板を設置して回った、最初の中国経験が初々しい感性で活写されている。旅行で最初に行ったのは、漢口、ここを皮切りに、九江—南昌—上海—杭州—銭塘江—富陽—桐廬—嚴州（建德）—蘭溪—竜游—衢州—開口—上海—南通—海門、さらに崇明島と回った。その後漢口、九江、南昌へ二度目の旅行をした。田口社長へ毎日送る上海通信は、以後大学目薬の貴重なデータ資料となる。内山は「大正2年は私のためには非常に愉快な年であった」と締めくくっている。

当時の目薬について簡単に調べた。日本では炊事や暖房の際、家の中で火を焚くために目を患う人が多かった。江戸時代にも軟膏や水薬はあったが、液体目薬は明治になって普及した。まず岸田吟香はアメリカ人医師・ヘボンから硫酸亜鉛を主成分とする目薬の処方を知り、銀座に楽善堂を構え、「精鈔

水」の名で点眼薬を販売した。その処方は、硫酸亜鉛1対水450の割合であった。しかし、1897年頃には精錫水は衰退した。これを受け継ぐように1899年頃に登場したのが田口参天堂の「大学目薬」という点眼薬であった。主成分は精錫水と変わらない。発売当初、そばが1銭5厘だったのに対し、これは10銭であった。第一次世界大戦後の1918年には倍の20銭に跳ね上がった。

1914年、昆山花園22号にあった日本人基督教青年会の活動を紹介している。また、中国各地を訪れた際に見聞きした日本人商人の様子が描かれていて、当時小規模、個人経営の日本人雑貨商が数多く中国の地方都市にまで渡っていたことが分かる。湖南で広告活動をした際のエピソード。大学目薬が以前委託した薬房があり、訪ねてみると主人がおり、4年前に代替わりがあったというが、引き継いだものの中に大学目薬関係の紙包みがあると言って、それを渡してくれた。その中には詳細を書いた紙と残品、売り上げが同封されていた。内山は、中国商人の道徳には何ものかがあると考えるようになった、と述懐している。この年、初めて杭州―紹興―寧波へ足を伸ばし看板を打ち付ける広告活動をした。内山の上海通信と中国に関する諸情報は田口社長から高く評価された。帰国時、牧野牧師から結婚の話があった。

この年、大学目薬の一頁広告を上海の各新聞に掲載し、購読者が掲載紙名を書いて請求すれば、孔孟の画像を石版刷りした対聯を贈呈するという宣伝活動を新たに展開した。対聯は約1万本を用意したが、たくさんの応募があった。一頁広告は『申報』『新聞報』『時報』『時事新報』『民国日報』『神州日報』などに載せた、とある。ただし、筆者が調べた限りでは、『申報』には、この年、大学目薬の小さい広告が21回掲載されたものの、一頁広告はなかった（再調査中である）。

1915年2月、井上みきと婚約。1916年、結婚。3月に内山夫妻は呉淞路義豊里164号の伊谷家の2階に居を構えたが、みきの判断で約1年後には北四川路魏盛里の新居に落ち着く。この年、内職本屋・内山書店誕生。上海は排日運動で、薬は売れないからと広告もせず、ただ薬店に預け置いただけの目薬が実は好調な売れ行きを示した。内山は汕頭―廈門―福州―台湾淡水まで広告活動を広げる。台湾では人々が小銀貨の両替を求めるので、何事かと思いきや、大戦の影響で金価格が下落し、銀価格が高くなってからであることに気づいたという。銀本位の中国経済は銀の流入によって大きな刺激を受けたはずである。1929年の世界恐慌の際も同様の経済現象が見られる。

1919年、五・四運動の起こった年である。不安定な世情のなかで上海出張員は上海における営業についてかなりの判断権限をもち、諸条件に合わせて販売方法を変えたり価格設定を調整したりして、自主的に対応したことが分かる。

『花甲録』は年ごとの解説がなされているが、その解説内容が当該年に該当しない場合があるので注意が必要であるということは、読み合わせ会でしばしば確認されてきた。内山自身もそのことを重々承知していて「私はこうして一年々と年代順に書いてはいるが、実はその年代が甚だ不確実なのである。とは云えそれは飽くまでも年代のことであって事柄は決して不確かなものではなく断然正確なのである」と述べている。

1921年、早稲田大学の内ヶ崎作三郎を各地に案内し、その講演を準備した。講演は極めて好評であった。『花甲録』には、この年、谷崎潤一郎を郭沫若、田漢、郁達夫ら中国の作家に合わせたとあるが、読み合わせ会では、その時期はもっと後の1926年ではないか、と議論になった。年代については注意が必要であるというのは上述のとおりである。



図4 『大学目薬』のパッケージ、容器、ガラス管（北多摩薬剤師会ホームページより）

このころ上海で活動する研究者には、安原美佐雄、東正則、池田桃川、井上紅梅がおり、のちに井村薫、浜田峰太郎が加わり相当活発であったという。それに比べ上海の日本人書店は日本堂、申江堂、至誠堂、内山書店の4軒で、いずれも内容としては貧弱であったと振り返っている。

1922年。大学目薬の偽物が出てきた。「文学目薬」という。商標の文字のデザインは全く大学目薬と同じであり、商標の人頭もそのまま、要するにパクリである(図3参照)。本店からは直ちに訴訟せよという通知が来たが、内山は文学目薬に対して「私の飯の種が冒牌(にせもの)である文学目薬に邪魔されるとなると黙って居ることが出来ない」。文学目薬は「文学目薬の商標を造るべきである」と道理を通し、一回の交渉で問題を解決し、在庫処理の販売も許可した。上海の有名な六神丸本舗の「模造品、仮冒品が多く出来れば出来るだけ真正六神丸の有効性が立証されるのである」という立場に中国人気質を見ていたからであるという。

文芸漫談会のはじまり。内山初め、石井政吉、升屋治三郎(本名 菅原英次郎)、塚本助太郎、竹内良男が参加、中国演劇の欧陽予倩、田漢らも参加した。なお、森平崇文氏の最近の研究によれば、同じメンバーによる「支那劇研究会」は1923年末に昆山花園の日本人基督教青年会内に設立され、1924年～26年にかけて『支那劇研究』(全5巻)等を刊行した。編輯人は内山、発行元は内山書店、印刷は芦澤印刷所であったという。

1923年には、関東大震災救済募金活動があり、年末は未曾有の金融逼迫となった。上海商人の同業組合では年末決済を一期(4か月)延ばす申し合わせができた。内山は上海商人の同業組合における結束の強さと関係の確かさに大いに共鳴している。

大学目薬の上海出張員の仕事が詳細に紹介されている。項目のみあげておくと、広告の種類は、①紙看板を貼ること、②鉄看板を打つこと、③引札紙を撒くこと、④旗行列の行進、⑤壁書、⑥新聞広告、⑦暦くばり、等である。このほかに大学目薬の実物を進呈する広告もある。

1924年。内山書店は「小さいながら内容を充実させたので路地の中の店ながらお客の評判はいよいよ好くなった」。その後、隣の家屋も譲り受け「此処に内山書店は石庫門二軒を一つにして内部を全部白塗りにして入口が二つで両側と奥の正面とを全部柵にした。高さ十一段で十八列あるから百九十八段の柵が出来て、その柵にピッシリ新刊書を詰め込んだところは一寸壮観であった。誰れが来て見ても押しも押されせん日本でも一流の書店であると云うた」とある。

四川省への特別売り込みを計画して重慶の華英薬房に10万瓶委託を実行、同時に漢口の華英薬房にも5万瓶委託を実行した。このころ香港、汕頭での売れ行きが目に見えて増加した。また、日信薬房引き上げのため大学目薬を内山書店の中に移した。

1925年には五・三〇事件があった。内外綿のストライキの話を引きかけに、一つの工場の労働者は郷土的に塊をなしていることが解説されている。郷土幫という。この幫には必ずリーダー(老板)がいて、労働者も会社に雇われていると考える者は一人もおらず、みなリーダーに雇われているつもりであるという。また、ストライキのきっかけとなった「人を打つ」ということが日本と中国では相当に違うことが説明されている。つまり中国の喧嘩には段階性がある。まず「哇拉々々(さわぎ)」あり、それが進んで「打相相罵(口げんか)」となり、さらに進んで最後に「打相打(殴り合い)」となる。日本人がこの段階性を解さず、最初からポカポカとやれば、それは大問題となるのである。しかし、老板を介すればほとんどの問題は解決するという。

各年の年表に大火が数多く引かれていることが読み合わせ会でも話題になった。内山はこう述べている。すなわち、日本の水災と火災、「これは実に日本の二大災厄である」。一度に千戸、五百戸と、上下の損害は莫大であり、生産力の中止、復興のための労力を考えると実に大変であるとし、日本の政治家はなぜこの大財産の消失予防を講じないで戦争を考えたのであろうか、と疑問を投げかけている。

1926年。日本出版界における驚異的事件として、改造社の現代日本文学全集全50余冊の予約開始を

取り上げている。1冊1円という安値で毎月配本する。いわゆる円本時代の先駆である。それに続けとばかり、雨後の筍のごとく円本出版が発表された。内山書店でも、現代日本文学全集1000部を初め、世界文学全集、経済学全集、マルクス・エンゲルス全集等々、大量の取り次ぎをし、毎月入荷時には路地の中に山のように荷物を積み上げたとある。内山書店のファンは、第一は教会の信者仲間、次は上海読書界の人々、特に正金銀行、三菱銀行の人々で、総じて銀行関係者には読書家が多かったという。東亜同文書院の学生も同様であった。

1927年。読み合わせ会では、まず歴史年表に4.12クーデタの項目がないという指摘があった。理由は定かではない。「追加事項」には南昌の賀竜、郭沫若らが蒋介石と決別したとあるが、上海の様子については言及がない。また、この年、魯迅が広東から上海にやってきた。内山と魯迅の出会いが述べられている。最初の出会いがいつかは覚えていないが、魯迅が周樹人と名乗り、内山が「ああ貴方が魯迅先生ですか」と応えたのは記憶にあるという。北京大学の李大釗、陳独秀なども来店していたことをあとで知ったという。彼らと知り合うようなことがあったら、内山はその後どのようになったのであろうか、と私は考えた。

1929年、内山書店は北四川路の終点にある新店舗に移転した。中国人苦力についての言及がある。日本郵船匯山埠頭の苦力のストライキに際して長崎の沖仲仕を急遽招来したが、その力量は中国人と比べものにならなかった。中国人苦力の旺盛な労働力は、また南洋華僑成功の根本原因でもあるという。労働力を資本にして稼ぎ、少額の貯金から始めて商人として成功していくケースが多い。金と銀とを天秤にかけての蓄財法も世界無比といわれる。そして、中国の貿易収支は赤字だが、国際収支が均衡を保っているのは華僑送金のお陰だ、と述べ、「半植民地」と呼ばれながらも、容易に倒壊することのない中国経済の底力を華僑苦力の存在からときほぐしている。

1930年、内山45歳。參天堂と決別した。田口社長の死去と社内関係の悪化とが原因である。「支那劇研究会章程」が紹介されている。この年、内村鑑三が死去した。内村は日露戦争前、万朝報の主筆を担当し、国内が戦争熱に煽られているなか、キリスト教の平和、非戦論の論陣を張ったが、新聞の売れ行きが悪いという理由で営業部から非戦論の中止要請があった。内村がこれを断ると、万朝報は内村の主筆を解職した。内山はこのエピソードを怒りをもって紹介している。